

令和4年度京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会（準備会）会議録

1 開催日時：令和5年2月9日（木）午後1時30分～15時30分

2 開催場所：京丹後市役所大宮庁舎 4階 第2・3会議室

3 出席者：

岩本 悠 委員

上田 隆嗣 委員

荻 弦太 委員

古賀 稔邦 委員

高橋 一也 委員

田茂井 勇人 委員

竺沙 知章 委員

長井 悠 委員

中川 哲 委員

中道 浩 委員

平野 佐世子 委員

牧野 光朗 委員

ヤング 吉原 麻里子 委員

京丹後市長 中山 泰

大西 徹 オブザーバー

塩川 達大 オブザーバー

(欠席者)

井上 知英 委員

事務局：

京丹後市副市長

濱 健志朗

京丹後市教育委員会 教育長

松本 明彦

京丹後市 市長公室長	川口 誠彦
京丹後市教育委員会事務局 教育次長	引野 雅文
京丹後市市長公室 政策企画課 課長	松本 晃治
京丹後市教育委員会事務局 学校教育課課長	川村 義輝
京丹後市教育委員会事務局 教育総務課課長	溝口 容子

#### 4 議 事

- (1) 京丹後市の教育・産業の現状等について
- (2) 自由討議
- (3) その他

#### 5 公開又は非公開の別 公開

#### 6 傍聴人 あり（報道関係者1人）

事務局：皆様こんにちは。本日はお忙しいところご出席いただき、誠にありがとうございます。オンラインでご出席の皆様、聞こえていますでしょうか。ご出席ありがとうございます。

それでは、定刻となりましたので、ただいまより、第1回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会・準備会を開会いたします。私は、本日の進行を務めさせていただきます、京丹後市教育委員会教育次長の引野と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、開会にあたりまして、京丹後市 中山泰市長からご挨拶を申し上げます。

中山市長：皆さんこんにちは。ご紹介いただきました京丹後市長の中山でございます。開会に当たってご挨拶させていただきたいと思っております。今日は本市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会、またその準備会ということで開催させていただきましたけども、市内外から大勢の先生方にご参加をいただいております。とりわけ岩本先生、また竺沙先生には直接遠路お越しいただき本当にありがとうございます。また、大勢の有識者、先生方にリモートでご参加をいただいております、心からの感謝を申し上げます。皆様には、今般、

この検討会委員あるいはオブザーバーということでご快諾を賜っております。大変お世話になりますどうぞよろしくお願いいたします。

さて、この検討会、実は2日前7日の日に、本市の総合教育会議の場において設置の決定をいただいたほやほやの検討会なわけですが、私も総合教育会議のメンバーとして、これからの本市の教育あるいは本市のまちづくりを検討する上で、この検討会、大変大きな意義の中、期待を寄せさせていただいているところでございます。というのも、全国もそうなんですけども人口減少が進む中で、われわれのまちづくり、次の世代にしっかりと希望を託せるまちづくりを進めていくということが何より大切なわけで、そんな中で次世代の人材をしっかりと育てていく、育てていく、そういう環境づくり、これが本市のまちづくりの大きな真の柱になってきているというふうに改めて受け止めているところでございます。その上で、例えば本市の総合計画にあっても、育むとう領域を大きな柱の一つにして、そしてもちろん全ての子どもたちにとって安心して必要な教育環境が享受できる、セーフティネットをしっかりと張り巡らされながら、同時に大切なことは、全ての子どもたち一人ひとりにとって、それぞれの夢や希望を追いかけることができる、あるいは向上心といったことを支えることができる教育環境を総合的にしっかりとつくっていく、そして時代の要請、グローバル化だったり、あるいはデジタル化だったり、いろいろ時代の要請はあるわけですけど、こういった時代の要請をしっかりと組み込んで、未来の教育の形を取り込んでいくことができる教育環境をぜひつくっていききたいということで、総合計画にもはっきりと謳わせていただいております。

そういったことも踏まえて、この間、教育委員会中心に、「保幼小中一貫教育」の体制を整えていただきながら、例えば STEAM 教育につながる丹後の素材を取り入れた「丹後学」の推進をしっかりと進めていただいたり、今年度からはグローバル・ローカルな人材育成ということで、全国の公立中学校では初めてとなる「ELSA Speak」の人工知能を取り入れた素材を活用して英語教育を進めていただいたり、あるいは今日の画面でヤング先生お越しでございますけども、海外に大学関係者の皆さんのお力をいただいて、コラボをして、そして STEAM 教育につながる、あるいはアントレプレナーシップ教育等にも

つながる「Kyotango Sea Labo」の中高連携の取組みにチャレンジをしていた  
だいたり、こういった形で STEAM 教育だったりアントレプレナーシップ教育  
の領域にチャレンジを、前進を続けていただいているところでございます。  
今後とも、そういった教育の形を進めながら、さらには今デジタル化が、社  
会実働が特段に進んでおるわけでした、デジタル化の進展によって、我々の  
ように都市部から遠隔の地にあつて、また高等教育機関のない地域にあつて  
の、地域の素晴らしい伝統文化だったり、自然環境だったり、こういった特  
色を生かしながら、そしてデジタルを活用することで、より充実した、時代  
の要請を取り入れた、先進的な教育環境づくりを進めることができる、そん  
な時代になってきたということを受けて、今後とも教育委員会中心に、教育  
委員会と連携して、こういった分野の教育を進めていきたいなというふうに  
総合教育会議として願っているところでございます。

今般は、様々な観点から、有識者の先生方、地元の関係者の皆様のご意見を  
賜りながら、本検討会の成果を得て、そして教育大綱あるいは教育振興計画  
につなげてまいりたいと思っております。

いろいろとお世話になりますが、どうぞよろしくお願いを申し上げます。簡  
単ではございますけども、ご挨拶とさせていただきます。

事 務 局：続きまして、京丹後市教育委員会 松本明彦教育長からご挨拶を申し上げま  
す。

松本教育長：「京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会（準備会）」の開  
会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。あらためまして、本日は、公務等  
ご多忙の中、準備会に出席いただき、誠にありがとうございます。

さて、本市では小中学校児童生徒数の急激な減少等により、学校の小規模化  
が進みました。そこで、教育委員会では、多様な他者との学習活動や多角的  
な人間関係の育成等を重視する観点から、保護者、地域住民の皆様のご理解  
も得ながら学校再配置を進めてまいりました。

また学校再配置によって、新たな学校づくりや地域づくりがスタートするこ  
とと合わせて、旧町を一つの学園とする施設分離型の小中一貫教育について  
も推進することとし、京丹後市教育振興計画に基づき、各学園が15歳の時  
点での目指す子ども像と学園教育目標を保育所、こども園、小中学校ですべ

て共有し、系統的で一貫性のある指導・支援を精力的に進めているところで  
す。

もちろん保育所・こども園も加えた小中一貫教育は、確かな学力、豊かな人  
間性等を育成するための本市の重要な手法であり、教育委員会としましては、  
どんな資質・能力を育んでいくことが「確かな学力」「豊かな人間性」の育成  
につながるのかを学校現場に確実に指し示し、その育成に向けた取組をしっ  
かりと支援しながら、その充実を図っているところです。

しかし、学校再配置や小中一貫教育に取り組んだ時期、現在の教育振興計画  
を策定した時期と比べまして、大きな世界要請の変化、AIの急速な進化やこ  
こ数年の新型コロナウイルスの蔓延による社会構造の変化等によって、求め  
られる「確かな学力」についてもかなり変化してきていると捉えているところ  
です。

そこで、次の京丹後市教育振興計画の策定及び教育大綱を検討し始める時期  
となっているこのタイミングで、先ほど市長の挨拶の中にもありましたよう  
に、本市では「丹後学」をはじめとした教科横断的な学習、探究的な学習の充  
実、ICTを効果的に活用した主体的・対話的な学びによる授業改善などを積極  
的に推進するとともに、グローバルな社会を生き抜く力を今後求められる資  
質・能力の柱と捉え、様々な取組を学校現場の理解も得ながら推進しようと  
しているところです。

ただ、こうした資質・能力については、義務教育の期間だけでその育成が完  
結するものでは到底なく、保幼小中一貫教育のその先の高等学校との連携に  
よる系統的で一貫性のある学びも重要となると考えておりますし、こうした  
学びを支えていただく地域の方々、産業界の方々との連携や積極的な支援も  
大変重要であると考えています。

したがいまして、委員の皆様からは、本市が今進めようとしております教育  
の方向性について、広く専門的な知見をもとにご意見をいただきたいと考  
えておりますので、限られた時間の中ではありますが、忌憚のないご意見をぜ  
ひいただければ幸いです。

詳しい説明につきましては、この後担当からご説明させていただきますので、  
趣旨等ご理解の上、本日はどうぞよろしく願いいたします。

事務局：ここで市長につきましては、他の公務のため、退席をさせていただきます。

それでは最初に資料の確認をさせていただきます。資料については、事前にメールで送信させていただいておりますので、オンラインでご出席の委員様は、そちらをご確認いただきたいと思います。

まず議事次第、資料1：準備会の設置について、資料2：名簿、資料3：教育と産業の現状説明資料、カラー刷りのもの、資料4：今後の進め方案、あと、参考として、京丹後市教育大綱と京丹後市教育振興計画の概要版を机上に配布、またリンクをメール送信させていただいております。

配布漏れ等ございませんでしょうか。なお、オンラインでご出席の委員様には、適宜、画面上で関連資料を共有させていただきます。

なお、本日の欠席者ですが、井上委員が、所用のため、ご欠席でございます。また、中道委員については、公務のため、途中でご退席の予定となっております。

次に、本日の会議の進行について説明をさせていただきます。冒頭で本準備会の設置についての説明させていただきます。そのあと議事に入りまして、本市の教育・産業の現状についての説明、その後は、時間の許す限り、自由討議をお世話になりたいと思います。討議のテーマは今回特に設けておりませんので、委員それぞれのお立場、観点などから、活発なご意見等を頂戴できればと存じます。

なお、今回と次回の準備会については、座長は設けずに、不慣れですが、事務局で進行させていただきたいと思いますので、ご理解のほどよろしく願います。

それでは、まず、当準備会の設置について、事務局より説明をさせていただきます。

事務局：(資料1説明)

事務局：ただいまの説明について、ご質問等ございますでしょうか。

事務局：それでは、無いようですので、議事に入らせていただきます。まず、京丹後市の教育・産業の現状等について、事務局より説明をさせていただきます。

事務局：(資料3説明)

事務局：それでは、これより約90分間、自由討議とさせていただきます。自由討議

については、ご発言前に、1分程度の自己紹介をいただいた上で、先ほど申し上げたように、それぞれのお立場、観点でのご意見、ご所見、またご質問があれば頂戴したいと存じます。

ぜひ全委員からご意見を頂戴したいと思っております。今回は、申し訳ありませんが、事務局から順次、指名をさせていただきたいと思っております。なお、途中で関連意見等がございましたら、挙手いただければと思います。

オブザーバーの大西様、塩川様についても、最後にコメントがあれば頂戴したいと思っております。それでは、岩本様からよろしく願いいたします。

岩本委員：岩本と申します。簡単に自己紹介ということで、私は今まで高校教育で関わらせてもらってきました。隠岐という日本海の離島があるのですが、そこで市町村のほうの教育委員会で8年ほど、そのあと島根県の教育委員会のほうで8年ほど、今文科省の中央教育審議会とかに関わらせてもらって5年ほどになります。その中で事務局をさせていただいたり、会議に参加してきて、私の経験からしてこういう会が本当に熱を帯びて、そこから出てくるものに魂が入るようになっていく上で、どういうものがあるとできて、どういうものがないと割と淡々として形はできたという程度のもものになってしまうのかというところで、3つの抜けがちな視点というところで、大事と思うところ最初に述べさせていただきたいと思っております。

抜けがちな視点の1つ目は、当事者、子どもの声の視点です。今回は中学生とか高校生になるのかなと思っておりますけども、その姿を校長先生とかは日々見ているからいいですけど、参加されている方もどこかで一度そういう姿を見ながら、実際の生徒と今の教育だとかこれからってところの対話をしたという、そういう場があるだけで、全く場の空気だとか関わる人間の熱量だとかも含めて変わってくるので、そのプロセスの中でどこかでその当事者、中学生や高校生の姿を見たりとか、場合によっては生の声を聴いたり、意見交換という大袈裟ですけども、そういう場があってもいいのかなというのが1点目です。

2点目が、未来視点というか未来の意思です。恐らくここで議論することも、次の4月からは当然何も実行されないと思っておりますし、早くて恐らく行政の場合2024年の4月からですかね、場合によっては予算化のことも考えて

2025年の4月みたいな話になるかも知れない。ここで議論したことはそれぐらいのスパンでしか実行にはなかなか移せないと思います。例えば、2024年の4月に中学校に入った子たちが、中学校3年間、高校3年間、4年制の大学に行ったとして22歳で社会人ですね、その子たちが社会人になるタイミングって2035ですか。ですので、今起きてることだとか、どうしても今目の前の子たちだとか、今の現状から発想するんですけど、ここでの議論というのが本当にその人材といったときに、そこで議論されてそういうものを学んで力をつけることを考えると、最低10年は時間軸にギャップがあるというか、少なくとも2035年とかに社会人になっていってそこから社会で幸せに活躍していくとかっていう、ある程度そこまでの時間軸を見据えようとして議論しないと、今目の前で起きていることでの対処だけになってしまったりするので、あとはその頃に日本がどうなっているか、市の人口がどうなっているか、数字である程度出るところは出るわけですけども、そういう客観的なものに加えて、どうなっていたいのかとか、どうありたいのか、どういう地域で、どういう教育で、どういう学校でとか、そこにその意思が入った議論になってくると熱が変わってくるという、未来視点とか未来の意思というところですね。

3点目が地域という視点であり、地域色です。どうしても私もそうですが、教育委員会とかでやっているとこの教育と学校との視点で終始していくという傾向になる中で、これ例えば京丹後市は10年後どうなっていたいのかとか、どういうまちになってほしいのか、まちにしていきたいのかもしくは産業界の方であれば、自分たちの産業がどういう状態であってほしいのかとかですね、そういった視点からまた今の子どもたちだけではなくてそういった地域側の視点だとかっていうところも入ってこないと、所詮、学校や教育委員会や教育に今いる人たちだけでやろうとすることは、もうリソースが限られているので、どれだけその地域の様々なそういうステークホルダーの願いだとか思いがここに入ってくるのか、重なっていくのかっていうところなんです。もっと言うと、ここだからこそこできるこういう資源があり、これを使っていこうみたいな視点がどれだけ入ってくるかみたいなところ。失礼ながら今日の資料3を見させてもらって、特に教育委員会のところを見てみると、



これ他の市町村でも何かこういうテイストの取組になりそうだなみたいな、名前さえ変えたら、素晴らしいこと先進的なことしていると思いますが、ここに本当に地域の色がどれだけあるのか、ここだからこれだみたいなものがあるのかと。教育関係者的には僕はすごくいいと思っていますが、やっぱその京丹後市だからこの色みたいなのがまだちょっと弱いような気もして。そこがこういった議論の中で入ってくるっていうことが熱を帯びていくというかですね、魂が入り、つながるのかなと思いますというのが3点目です。

最後何か多分ここで計画なのか紙でまとめて何か作るのだと思いますが、それをちゃんと実行されて実現化するっていう、その実行と実現っていうところに行くものなのか行かなくなっていくのかっていうところの、やっぱ大きな差っていうのはここに参加している人間が私もそうですけども、第三者ですけど、どれだけ主体者になって、終わったときに主体性になっているのかという客観的に批判的にとか市が作ったという話ではなく、これをぜひ一緒にやっていきましょうと、ここに参加した人たちも自分ごとになってこれをやっていく、こうしていきたいというぐらい外部から来た人間も含めて当事者になるようなプロセスにできるかどうかというのがその後の実行だとか実現というところにエネルギー持つものなのか、紙切れだけになってしまうのかっていう違いだと思います。その時には恐らくプロセスとしてとても今割と堅い場だと思いますし、あの関係性も全くできてないですし本音は言い難い場だから、多分表面的なことばかり言いたくなっちゃうような、綺麗なこと言わないとなみたいな場になっていると思うのですが、これがどれだけ本音で本気で自分の言葉で話せるような場にこの先なっていくのかというところが一つの試金石だと思います。それを作っていくときには、恐らくこの会議室や、このオンラインの外のコミュニケーションをどれだけ取れるのかっていうところが重要で今日はないですが例えば、終わった後に何かちょっと有志で懇談会そこでさらに他みたいな続きがあるとかですね。それこそ現場に行ってみながら話をするとか、私もよくやりますけど視察みたいところで、みんなで共通体験をして共通のものを見てこういうのを一緒に作りたみたいな。もしくはその移動のプロセスも含めてコミュニケーションが起

きていて、そういうなかでチーム感や関係性ができて、熱が上がっていくところもありますので、こういう会議は会議でとても重要でなんですけど、実はそれ以外のプロセスの中にも本気でやろう、実現しようとしていく場を作るのであればそういった工夫も今後はあるといいのかもしれないなというのが私の経験からの意見です。以上です。

事務局：岩本さんありがとうございました。

今後議論したことを実行していく上で大変大事な問題提起だとか、あの提案を4点いただいたと思います。ありがとうございました。この後ですけども会場の方からまず教育関係の方、そして産業関係の方ということでこの後ご意見お世話になりたいと思います教育関係の皆様につきましては昨今の社会の変化をどのように捉えておられて、それを踏まえた教育のあり方の方向性だとか、人材像のようなことがおありでしたらお聞かせいただきたいと思えますし、産業界との関わりの強化などについても触れていただけるとありがたいというふうに思っております。それでは最初に峰山中学校の上田校長先生お願いできますでしょうか。

上田委員：京丹後市の中学校の校長会の会長を務めております峰山中学校の校長の上田といいます。よろしく申し上げます。

新たな教育・人材育成のあり方という非常に大きな表題の中で参加させていただいていますが、先ほどの資料を見させていただいてもどんどん人口が減っていく、この京丹後市がどう日本の中で生き残っていくのかというような本当に危機感を持っている。今説明あったように丹後学というのを小中一貫の中で別に据えてやっていくなかで郷土に対する誇りですとか愛着っていうのは非常に育っているということは、高等学校の先生や大学でいろんな話が出てくるというような内容も聞かせていただいて、大変いいことだなと感じています。一方で京丹後市をどうしたいのか子ども、自分が京丹後市に帰って京丹後市を守るといところまで育てきれているのか自信が持てないところ。そこまで危機感を持ちながら中学校の義務教育の中でやっていけるような今回のどこに視点をあてていいのかなということも考えながら参加をさせていただいています。

このコロナで職場体験ですとかいうのもできにくくなったのですが本校では、

昨年度から取り組み、丹後教育局の事業の取組で地域の機械産業など職場体験を行かせてもらい学ぶ機会もあります。また織物ですとかそういったところも勉強しながら子どもたちは大きくなってきています。本校はちょっと観光面の勉強か少ないかなとも思いますが、そういったところの勉強はし、自分がそこを京丹後市のそこをどう守っていけるのかというようなところまで意識して高校大学、次へというような志まで持たせるのがいいのか。もっと広く世界で活躍する子どもたち、そういった視点を広げるのがいいのか。というところはなかなか中学校で決めきれないところがあったりします。京丹後市が生き残るにはそういう京丹後市を本当に守ろうとする子どもたちにしないと、どんどん人が減っていってしまうし、そういったこれから先を見据えた子どもたちの育成というところは考えるところに来ているのかなっていう危機感は思っているところです。

そしてもう一つは、そういった教育をするまちである京丹後市をどう発信して魅力ある教育をするから京丹後市に住んでみたい。そういう若い世代を取り込めるようなそういう発信の仕方もアピールする必要があるのではないかなというようにも思います。1月1日に全国の自治体の調査で、やっぱり教育に関心を持っているという若い世代も非常に多いというようなデータ発表もありましたし、そういったところで魅力を発信するような、そういうようなまちにもなれたらなというようにも思っています。

でも本当に京丹後市は教育にいろんな取組にお金をかけていただいて、先手先手でいろんなことを取り組んでいただいていますので、そういったところに向かっていけるような、そういう義務教育最後の中学校ではありたいなというふうに思っているところです。以上です。

事務局：ありがとうございました。現場の生の声聞かせていただきました。

中道校長先生よろしくお願ひ致します。

中道委員：峰山高等学校長の中道と申します。よろしくお願ひします。

私自身、久美浜町で生まれ育ちまして高等学校までは京丹後市の方で過ごしておりまして、2年前に峰山高等学校の校長を拝命しまして、戻ってきました。いろんな地域といたしまして、舞鶴であったり宮津の方であったりとかなんですけれども、その中で京丹後市の教育はすごく地域とのつながりが深

いなというふうに思っているところでもあります。具体的にまず驚いたのが京丹後市の方から、地域コーディネーターを本校の方に配置していただいていること。

この方ハブとして、地域のいろんな方とつながっていて、ものすごく生徒の刺激とか学びとか気づきにつながっているという、これはちょっとものすごく先進的なこと。まずこれが一番驚いたことです。導入から3年を迎えてこれからどうしていくかっていうこともちょっと考えていかなければいけないと思います。

それから私自身英語の教員でしたので、Sea Labo の取組を副市長の方からお話いただいたときには、大学みたいなことされるのかと正直すごく驚いたのですが、逆にこんなことあるのかなぐらいの、すごく先を見通しているいろんな取組をやっていくっていうことがやっぱり生徒にとってはものすごく刺激といますかですね向上心というか、視野を広げるといふか、もう本当に教育が高いというふうに思っています。Sea Labo の取組につきましては、残念ながらまだ一部の生徒が対象となっておりますので、これをどう学校全体に広めていくのか、そしてそれを次の進路につなげていくのかっていうあたりもちょっと課題意識を思っているところでもあります。

それからちょっと時間がなくなってきたのですが、先ほど上田校長もおっしゃったのですが私もどうなのかと思っているのは、やっぱり世界に羽ばたくことを目指すのか、やっぱり地域に残って地域を支える人材をつくるのか、ちょっと焦点が定まらないといふか焦点を定めるべきなのかどうかわかんないんですけど、そここのところはやっぱりなかなか答えが自分の中で見つからないというふうな部分です。そういったところで皆様からご意見をお聞かせいただきまして参考にさせていただければというふうに思います。最後一点だけですが、府立高校ですのでちょっと市町との関係とは違うんですけども府立高校では府立高校のあり方ビジョンというのが策定をされたところ。これに基づきまして教育委員会の方から近々スクールミッションというものが定義されて、学校の方に来ます。それをもとに各学校がスクールポリシーというのを決めることになります。本当にこの会議が有効なものになるためにはここの整合性、一体感を持ったものにしないと、府の方はこの方向でこ

の学校はこうですよっていうふうに行くだけでも京丹後市の方はこうですよっていうふうなところでその辺のすり合わせとをし、そういったところも意識していかなければいけないのかなというふうに思っているところです。ちょっと長くなってしまいました但皆様からいろんな視点での、ご意見を伺えること本当に楽しみにしております。ありがとうございます。

事務局：ありがとうございます。府立高校ということで市町村との今後のまた連携強化ということが大変大事だなというふうに感じました。ありがとうございます。それでは続きまして産業関係の皆様からご意見いただければと思います。

特にこれまで産業界と教育の関わりというのがどのように捉えていただいているのかといったことですか冒頭で岩本さんの方からもちょっと産業のことに触れていただきました今後の産業の動向をどのようにお考えなのかといったことだとかそれを踏まえた今後の本市に必要な人材像みたいなことがあればご意見等いただければと思います。最初に丹後機械工業組合からお世話になっています。荻様、お願いいたします。

荻委員：丹後機械工業組合の青年部で副部長を務めております荻と申します。よろしく申し上げます。こういった会議に参加するのは初めてなもので固くなっておりますけども、徐々に柔らかくなればいいかなと思っておりますのでよろしく申し上げます。

普段は丹後プラスチックという会社でプラスチックの切削を主に行っております、なかなかなじみのない産業というか、プラスチックを削っているところ見るところはあまりないと思っておりますけども。身近なところで言いましたら消防団の名札であったりとか、それこそ中学生の学生さんの名札作らせていただいております。恐らくこのパーテーションも弊社から作っている商品だと思っております。あとは半導体関連、航空部品、自動車部品、医療部品などなどあらゆる作業の樹脂部品を製作しております。それ以外にも私バンド活動を長年やっております、製造以外の分野でも、芸術やカルチャーといった面でも何かお役に立てればなと思っておりますここに参加しております。私も10年ぐらい前に丹後の方に戻ってきておまして、それまでは大阪だったり東京だったりっていうところで丹後を出て仕事だったり活動をしていた

のですが、こうやって丹後地域にまた戻って仕事なり何かで貢献できればな  
と思って丹後の方に戻ってこういう仕事をさせていただいております。10  
年ぐらいこの製造業というものに携わって感じたのが丹後のもの作りの技術  
力っていうのは本当に日本を代表するぐらいのトップクラスの技術力が集結  
している地域だなとこれは改めて感じました。幼少の頃とか学生の頃はあま  
りその技術力がある丹後がもの作りに特化した地域だっていうのは正直感じ  
ていなかったのですが、いざこうやって従事自分も加工したりとか金属関係  
の皆さんの仕事の内容とかを拝見したときに、すごい技術力を持っている地  
域だなとそれを改めて感じまして、どうやってこの技術力を、次世代に継承  
していくか、常日頃思っておりまして自分の会社でもそうなのですが、若い  
世代にいかにか職人さんの技術力であったりとか最新の知識 CAD、CAM を使った  
プログラミングでしたりとか、そういうあらゆる面でどうやって継承してい  
ったらいいかっていうのを非常に課題かなと思っております、峰高の機械  
課のデュアルシステムって言う教育のカリキュラムがあります。それで峰高  
生の機械科の方々がいろんな会社さんに体験といいますか体験教育仕事の体  
験をする非常に最新のカリキュラムがあるなとは思っています。そのまま丹  
後に残ってくれたらいいのですが結局流出というか大手さんに行く。それは  
素晴らしいことなのですが大手さんの方に就職するなど丹後を出て行って仕  
事をされるっていうことが多いのかなとちょっと感じておりまして、中小零  
細の企業に残ってくれる人材っていうのはまだ現状少ないのかなと。そこま  
で一貫して就職まで一貫して、デュアルシステムをさらにバージョンアップ  
させた就職までバックアップしてくれるようなシステムがあったらいいなと  
は常日頃思っています。また技術力や体験したものをそのままその会社で発  
揮してもらえたらより素晴らしいなと個人的には思っています。以上で終わ  
ります。

事務局：ありがとうございました。まさに産業と教育ということでね、どのように継  
承していくかといったところ出させていただきました。今後の大事なテーマに  
なるかなと思います。続きまして丹後織物工業組合の田茂井様、よろしくお  
願いいたします。

田茂井委員：丹後織物工業組合の理事長をさせていただきます田茂井と申します。会社は

網野町浅茂川で田勇機業株式会社という織物業をしております。よろしくお願いたします。私もこういう場で、しかも教育というところで本当に参考になるような話がどこまでできるかなと思っているところですが、話を聞いていただけたらなと思っております。僕も高校から丹後を離れまして大学、社会人と15年間ぐらい外に出ていました。当時仕事先が東京だったので、丹後に帰ってくるのが嫌で仕方なかったのですが、丹後に帰ってきて野間の方の溪流釣りに行くとなんていい所だと、もっと早く帰ってこないとかあかんんだなと思って。しかも浅茂川なので海がすぐそばにあるし、これはいいとこだなと思って。東京でぎゅうぎゅう詰め地下鉄で通っていることを考えると、人が住むところじゃないと思っていたので、丹後が改めて好きになりました。

そういう意味では丹後をやっぱり離れていくっていうこともひとついいことだと思っています。どうしてもやっぱ大学とかもないですし僕1回外に出るべきだと思っていますので1回外に出ていろんな刺激を受けて学んだことを丹後にぜひ持ち帰ってきてほしいと思って、それを広げていただきたいなと思っています。なかなか僕らのころは生徒も多かったので大半が丹後を出てそのまま帰ってこないというパターンが多いですけども、僕はその長男だったんで昔からあんたが跡取りという育て方をしていたので帰ることが当たり前だっという中で育ってきました。この織物業から言いますとそういう意味では僕らの親の世代っていうのはもう機屋やってもだめだということで、そう言われるとやっぱなかなか発展しようという意識も出てきません。そういう意味で僕は今、やっぱ自分がやっている仕事に対して特に丹後ちりめんっていう白生地の中でいくと、織物業でいくと日本の文化の裾野を支える産業なのでそういう意味では織物がなくなると日本の文化がなくなるに等しいってことであの誇りを持ってやっているってことを子どもらにも伝えて丹後はいい所だと刷り込みまくってようやく長女が先月帰ってきてくれましたですね、大成功したなというふうに思っているところでもございますけれども、そんな中でやっぱ、やっぱ親の責任というのか、そういう育て方をしてくればそうなるのである程度自分たちも帰ってほしいなとか思うと、そういうことは子どもたちにしっかり伝えていかないと。いろんな選択肢があ

るので、縛るわけじゃないですけど、やっぱそういうことは伝えていかないとあかんのかなと思っています。ただ今の若い子ら見てると僕らの頃よりだいぶ地元愛というのかは結構感じている方々が多いのかなとも思っていますし、現役の大学生なんかでも自分で起業して、Webでその着物の販売のプラットフォームを作るなどですね。丹後出身の男の子なんかそういう活動をしたりとかですね、いろんなところで活躍もしているということでありがたい部分もありますし、結構Iターンでこられる方もおられたりしつつありますし、そういう若い方々がこちらに定着していただいて、人口もそれで少しでも増えていくようなことにつながっていけばなと思います。

会社としましては丹後学で地元の小学校の4年生の方々に来ていただいて、割と10校近く毎年来ていただいています。その中でも先ほど話した仕事に対する誇りという部分を伝えて、本当にやっぱり織物業がなくなるっていうことがそういうことなので、皆さんも1人でもまたこういう業界に入ってくればなということも話してもいますし、そういう中で僕らの頃は機屋しかなかったような時代で、大半が手を挙げたのでしょうけど、今この中でおじいちゃんおばあちゃんお父ちゃんお母ちゃんが機屋しているのかと聞くとポロポロっと手が挙がるか全然挙がらない場合もあったりするとやっぱ寂しい限りで、そういう意味では少しでも夢の持てる産業にせんなんというふうにも思っています。

そういう意味で先ほど海外へということという話もありましたけど、実は僕先週までイタリアに行っていて展示会に出展していました。そういう意味でも先ほど荻さんが言われましたけども、やっぱり丹後の技術ってこの世界に誇れる技術なので、特に織物もそうですし、やっぱり海外でこの織物のすごさっていうのもわかっていただけますし自分らも感じるができます。それが夢になるかどうかはあれですけども、一つのやっぱり着物だけではなくて、もっと幅広い視野を持っていかんとあかんと思っていますのでそういう意味でやっぱ世界を視野に入れるっていうことは一つなので少しでも夢を持って丹後からその世界に向けて発信できる人材っていうのはもうぜひ育てていただきたいなと思っています。そういう意味では僕もSea Laboにも参加させてもらいましたし、あの取組っていうのが本当に生徒さんたちの積極性



というのはすごく感じられて、みんなすごい人達だと思って感心もしましたしすごく心強く思いましたし、いろんな可能性を感じる体験をさせてもらいました。そう意味ではSea Labo がもっと大勢の人らが参加してくれるようなことになって、世界に向けてさっき言いましたように発信できるような人材がこの丹後に多く育ててくれるといいなと思っております。以上とさせていただきます。

事務局：ありがとうございます。Sea Labo の方でも大変お世話になりましてまさにグローバル人材の育成という、今進めようとしているところにも関連する世界を視野に入れた取組の一端もご紹介いただきましてありがとうございます。はいそれでは続きまして京丹後市商工会の方からお世話になっております平野さん。よろしくお願いいたします。

平野委員：私は京丹後商工会青年部の部長の平野です。自分の仕事としましては18年前に京丹後市に引っ越しをしてきました。元々私が滋賀の栗東市というところが出身ですが、ここは元々おじいちゃんが、経営していたお醤油屋さんを継ぎに18年前に子どもと旦那と引っ越しきて、商売をしています。今は大丸醤油の醤油製造とカフェとあとセルフエステを運営させてもらっています。商工会の青年部としましては、子どもを持つ親が多いので私も今年15歳と20歳の子どもがいますが、丹後で2歳から引っ越しきて育てていますが青年部もこの親の立場になっている人がすごく多いので、私がこの10年ぐらい役員をする中で、やっぱり何か丹後の人って今自分が生きているこの環境が結構当たり前すぎて、私は違うところから引っ越しきてきているからこそすごいよねっていうのが当たり前です。私は結構山菜だったりとか、さっき言ったみたいな野間の鮎だったり鹿とかジビエ料理とか、あと星とか蛍とかいろいろとそういう普通やと思われているものが普通じゃないのでも、それって今の子どもたちもそうじゃないよっていう教育をしていけば、多分丹後にしかないものを、今このいる中だけでは自分で勉強できるというか、どうせ1回は都会に出るのでそういうときはそういうのを誇りに持てるように教育をしていきたいねっていうのを、青年部の方ではさせてもらっています。去年の事業で天女の里で魚を放流させてもらってそれを子どもたちが釣ったり掴んだりしてその魚のヌルヌルさを知ってもらったり青年部が用意した竹

を子どもたちがカッターで削って自分たちで串にさして火で焼いて食べたり、あとは野菜でその魚を蒸したりなどいろいろと1個のニジマスでもこれだけ美味しくできるし、こういう何が取れたりとか体験できるのっていうのは丹後やからできるみたいな、その丹後やからできる体験、魚釣りとか海のゴミ拾いなど、そういうものを青年部ができる限り何か子どもたちに伝えていけたらいいなっていうふうな取組をしています。

私の自分の事業としましては、製造販売と接客になっていますので私もだから丹後に引っ越してきて、最初に感じたのがやっぱりこの方言であったり、丹後に来たからどこに行ったらいいのかわからないっていうのが最初の普通の思いだった。結構丹後って観光で来るお客さんとかも多いのでうちのお店に来てくれる方は今までの経験とかも踏まえて、いろんな丹後の魅力をお客さんに発信できるような人間になるというか、いろんな丹後の情報を得た言葉をお客さんに教えられるような接客業をしてほしいなっていうのをいろんな講演会など何かしゃべる機会があったら子どもたちには伝えていっていますし、これからもそうしたいと思っています。自分の子どもも上のお兄ちゃんは今ちょうど海上自衛隊で料理作っていますがそれも丹後に引っ越してきて魚を好きになって、魚を捌いて美味しく食べさせてあげたいっていうのを発信したいし、いつかは自分でお店をしたいって言っているのです。そういう子どもたちが増えたらいいなっていうふうには思っています。

事務局：ありがとうございました。移住してこられたということでそういった視点で子どもたちに伝えたいことっていう大事なところをお話いただいたと思います。ありがとうございました。

それでは一旦ちょっと会場から出ましてオンラインでご出席いただいている皆様からこの後はご意見を頂戴したいと思います。まずですね前長野県の飯田市長であられました牧野様にお世話になれたらというふうに思います。牧野様これまでの国の会議体ですとか基礎自治体における豊富な行政経験等を踏まえて、教育改革を進めていくためにどのような点に留意をされてこられたこととか、あるいは本市のような地域ならではの教育改革のあり方というのをどのように考えるべきかというあたりでご発言がいただければと思います。よろしくお願いたします。

牧野委員：私自身、飯田市に生まれ育って、一度故郷を出て、政府系の金融機関に入りました。日本開発銀行、今の日本政策投資銀行ですけど、転勤族としてずっといましたが、日本各地まわりまして、様々な地域開発のプロジェクトに携わってまいりました。そうこうしているうちに、自分の故郷に帰って少しは貢献しろというような話が出てきて、一念発起して故郷であります長野県飯田市に帰りまして、市長を4期16年務めさせていただいて、その間ですね、全国の全国市長会の副会長や、あるいは国の経済財政諮問会議の専門委員、それから教育関係でいきますと、岩本さんと一緒にやってきておりますけど、中教審の高校改革にも携わってきております。そうした関係もあってですね、市長退任の後、文科省のマイスターハイスクールの企画評価会議の座長委員長を務めさせていただいております。そうしたご縁もあって今回、この検討会議にも呼んでいただいたというように思っております。

私市長時代からずっと高校教育に非常に関心を寄せておりまして、今日も京丹後市の状況でお話がありましたように、子どもたちがいつ故郷を離れて出ていくかという観点から見ますと、やはり高校卒業時ですね。高校卒業時までにはどれだけ地域のことをしっかりと学んでもらって、そして自分なりの考えを持っていただいて、その後一度故郷を離れるなら離れる、そうした中でまたやっぱり故郷がいいよねというふうに考えて帰ってきてもらえる。

これは私自身地域人という言い方をしておりましたけれど、まさに故郷を学びそして故郷を愛して、故郷に貢献したいと思えるようなそういった人材、地域人の育成ということに力を注いできたわけでありまして。この地域人教育というのはわたくし自身市長時代ずっとやっておりましたので、大体平成20年ぐらいから、地元の飯田長姫高校、今は統合して飯田OIDE長姫高校と言っていますが、ここと市で協定をいたしまして、地域人教育を、高校のカリキュラム入れていこうという考え方をとりまして、中学までのこの地域の学びをですね、さらに高校で発展できるような、そういったカリキュラムを、地元の地域の皆さん方と一緒に作っていこうということを考えてやってきたわけでありまして。こうした取組は全国的にも非常に注目されまして、先ほど岩本さんからもお話がありましたけれど、岩本さんがずっとやられておりました島根県の島前高校と、それから私が関わっておりました長野県の飯田

OIDE 長姫高校がまさにこの地域人教育の双璧と、こういう捉え方で文科省でも大注目をしていただいていたというものでありました。

この取組を進めるにあたって一番その課題に感じたのはですね、やはり市の教育委員会と高校は県立ですから県の教育委員会の関わりですね。これは学校教育の観点からはやはりどうしても義務教育と高等学校教育というのはそれぞれの管轄でやっていますので、なかなかそのところを連携してやっていこうというのには、あの当時からも壁があったわけでありました。

しかしこの壁を何とか乗り越えて地元のやはり市としましては高校生たちにも、ちゃんと地域の事を知ってもらえるようなカリキュラムを整えていきたい。そのためには、市の教育委員会は、学校教育課が関わるのではなくて、社会教育の観点から関わろうということでこのことが高等学校の学校教育と、地域の社会教育を結びつけるというやり方で地域人教育の枠組みを作ってきたわけでありまして。これをすることによって、具体的に言いますと公民館の主事が高校の先生方と、この地域人教育をどういうふうに進めるかということ、毎月定期的にこの話し合いをしながら、実際に進めていくということ、をずっとやっていく、継続的にやっていくという形で進めてこれが非常に大きな成果を上げるということになったわけですね。

こうした取組というものは何も島前高校や飯田 OIDE 長姫高校に限るものではないと考えておりまして、様々な高校でそういった取組を進めることで地域の将来を担うそういった人材を育成していくことができる考えたわけでありまして。

今私が文科省の皆さんと一緒に取り組んでいるのはまさにそういったこの横展開の取組をどうやって進めていくかということでありまして、岩本さんとも一緒にいさせていただいております、それが文科省のマイスターハイスクール制度になるわけですね。地域の将来を担う産業人材をいかにこの高校時代までに育てていくかということ、をテーマにして文科省としての取組としては、私画期的な取組だと思っています。といいますのは、この特徴がいくつかありますが、このマイスターハイスクールの考え方というのは地域の産業界の皆さん、それから地域の市町村、まさに高校がある地域の自治体、そして県の教育委員会、この3者が一体となって連携をしながら、この地域の

将来を担う産業人材を育成していこうという取組でありまして、そのために産業界から CEO に高校に実際に入ってもらって、いろんなその入り方ありますが基本的には高校の CEO になってもらい、校長先生を補佐する立場の教頭という立場になってもらい、そしてこの地元の産業界と高校教育の先生方が一緒になってこの産業人材を育成していくという考え方をとると、これ文科省の様々な学校モデル校制度の中では、私は画期的なものだと思っております。そこまで地元密着した形での制度というものはこれまでなかった。今までは、予算はついたら計画を作ってもらって、指定校を選んで、そこに予算をつけて、そして報告書を出してもらおうというそういうやり方が多かったが実際にこうしたあの仕組み作りまでかなり制度的にも関わる形でやってきているというものであります。またそういったそういう取組は当然地元にとっても初めての試みということもありますので、文科省としても、予算をつけただけではなかなか実現は難しいだろうということで、これは私自身があの提案させていただいて、文科省の方でもお認めいただいたわけではありますが、伴走支援の考え方を取り入れさせていただいたというものであります。つまり、マイスターハイスクールの指定校は、単にその地元の皆さん方とやるだけじゃなくて、まさにこのいろんな悩み事相談事が出てきたときにそうした悩み事を相談事ができる相手として伴走相手としてこのいろんな他のマイスターハイスクールの状況もよく知っている、そして実際にそうしたあの教育現場で起こっていることをよく理解している、そういう方々がアドバイザーコーディネーターとして各高校に入って実際にその支援をしていくという考え方でやっているというものであります。

これも今までのこの高校の指定校制度の中では画期的なものになっているかと思えます。

私はそういう経験をしてくる中で、まさに地域人教育やマイスターハイスクール制度に携わっていく中で、今回、岩本さんと一緒に、この京丹後の教育のこれからのあり方について関わっていければというように思っております。先ほど岩本さんからも具体的なご意見ご提言もありましたけど、私といたしましては、やはりこうした今まで関わってきた高校教育改革のその現場における様々な知見を、この京丹後市におきましても生かしていければと思って

おります。

一つ具体的な提案等をしてさせていただきますと、せっかくお車で2時間ぐらいの近いところに、このマイスターハイスクールのモデル校になっています。福井県の若狭高等学校がありますから、そこはぜひご視察をいただければと思います。以上です。

事務局：牧野様ありがとうございました。短時間でいろいろな事例のご報告ですとか提言もいただきました。今後の、大変参考になるかなというふうに思いました。ありがとうございます。

それでは続きまして、株式会社 EdLog の中川様をお願いしたいと思います。デジタル関係のお仕事をしていらっしゃるということでデジタルを活用した教育現場の変容、あるいは本市のような地域でのデジタルの活用の重要性などについて触れていただけるとありがたいかなと思います。

中川様どうぞよろしく願いいたします。

中川委員：簡単に自己紹介からさせていただきます。その前に今日本当でしたらお伺いしたかったのですが、オンラインで参加をさせていただいておまして、朝仙台から移動してきて今東京の自宅方から参加させていただいています。私は京丹後に家を持っておりまして、住民票は入れてないのですけれども、地域の人間の感覚で参加させていただいたらなと思います。自己紹介ですけれども、私株式会社 EdLog という会社をしております教育関係のソフトウェア開発とデータの利活用を会社で行っております。研究者としてもまだ活動しております。教育工学が専門になります。マイクロソフトに20年勤めまして、あの古賀先生その節は大変お世話になりました。ご無沙汰しております。もう一つ委員名簿の方にも肩書きで文部科学省の初等中等教育局視学委員というふうにご紹介させていただいております。GIGA スクール戦略担当で文部科学省の方にも籍を置いております。マイクロソフト時代中教審の私も部会の教科情報の委員をさせていただきますましてまさに今、大学入試のプログラミングとか高校情報1のプログラミングの中教審の意思決定の場でいろいろと活動をしていた関係で、マイクロソフト退社したときに文部科学省の方で小学校プログラミング教育の立ち上げをやるということでそのの本部長代理ということで3年ほど勤務をしておりました。そのあと視学委員ということで今でも文部科学省のお

付き合いをしております。あと東京都港区の情報教育局教育部参事官をしております。港区の GIGA スクールの立ち上げをお手伝いしております。あとは立命館大学客員教授をやらせていただいたりとか愛知教育大学の客員教授をさせていただいたり、主にちょっと初等中等教育の教員養成ですとか、教員の皆さんに GIGA スクールを使っていただくっていうところでいろいろと活動をさせていただいています。

ちょっといろいろお聞きをしまして、きっと私に求められているのは、京丹後の学校が GIGA スクールを余すところなく活用して日本を代表する意欲的な教育をする教育委員会や学校の皆さんの活動を教えていけばいいのかなどは思っています。優秀な人材を育てていって結局大学で外に出てまた戻ってくるってところはほかの委員の先生方にお話されたので学校をどのように GIGA スクールと良い関係を築いていくのかという考えたときに、やはり教師、学校の先生方としっかりと関係を作っていくことが重要だと思っております、よく呼ばれて講演してくださいとかあるのですが、もちろんそういうことも大事ですが実際に教育工学研究者を学校現場に入れていただいて、2年とか長い単位で付き合っているっていう先生方の学習感とか学力感、指導感というものを変えていくっていうことが重要なのかなど思っています。どうしても受験学力に代表されるような記憶の学習ですと知識を先生が子どもたちに教示していくっていう形になろうかと思うのですがなかなか子どもの方でモチベーションが上がればそれはどんどん集中していくのですが、あの興味ないことをずっとと言われると眠くなりますし、子どもたちが主体的に積極的にイニシアチブを取れるようにする。実は GIGA スクール端末というのを用意して文部科学省と一緒にデザインした経緯があります。そういう意味で言うと学力学習状況調査のデータ少し見ていきたいですけれども、利活用が 20%とか40%とかそういうことでは、私は全くまだまだと思っております、もう90%95%というような、普通に鉛筆やノートとして使うというような意識で必要な良質な情報をどんどん取り込んで情報発信していくということが子どもたちに当たり前に定着するような指導を先生と一緒にやっていくことというのが重要なかなというふうに思っております。そんなお手伝いができたらと思います。以上でございます。

事務局：中川様ありがとうございました。まだまだ利活用が足りないということで、これからもご指導いただければありがたいと思います。それでは次に情報経営イノベーション専門職大学の古賀様デジタルつながりということで引き続きよろしくお願ひいたします。

古賀委員：ご紹介いただきました情報経営イノベーション専門職大学副学長を務めております古賀と申します。情報経営イノベーション専門職大学という名称が非常にあの長いということで、IU というふうに呼ぶように本学の学長中村伊知哉から言われておりますのでぜひ皆様 IU と覚えていただければと思います。私は中川様がお話しただいてちょっと本当びっくり偶然にしても以前いろいろですね一緒にやらせていただいたので、本当に懐かしく思いました。情報経営イノベーション専門職大学、この専門職大学は2019年からスタートした新たな大学の種類です。我々の大学は2020年に開学いたしまして、今3年目でまだ3年生までしかいません。この4月から最終の完成年度を迎えてやっとな来年の3月に卒業させるという状況でございます。専門職大学はですね、特徴がいくつかありますが、大きな特徴としてはですね、実務家教員これを最低4割以上でなきゃいけないと。本学の場合ですと8割ぐらいですね実務家教員なっている。あともう一つの大きな特徴が、600時間以上の臨時実務実習これインターンシップがよく言われていますがそれが必須であると非常に短い期間の大学なんて非常に短い間のインターンシップはよくありますが、600時間以上、約4か月ですね、社会に行っているいろいろ勉強していくことが義務付けられております。文科省の方の専門職大学に対する期待としてはですね、もちろんあの若者の育成もありますが、最近よく言われるリスキリング社会人の学び直しですとか、また地域貢献といったことも、大学の方としても期待されているのでございます。先ほど今までお話された方の中でデュアル教育ですとかマイスターハイスクールとかですねそういう、いわゆる産業界と一緒に教育を行うといったことである意味同じような、カテゴリーの大学であるかなと言えらると思います。京丹後市さんとはですね開学からですね、実は本学の教員が京丹後市のDX化プロジェクトといったことをやらせていただいている。学長と市長様が以前からつながりがあるということで、いろんなところでつながりを持たせてい



ただいております。私自身のことをちょっとお話しますと、情報経営イノベーション専門職大学の設置母体であります学校法人電子学園という学園がありますが、その電子学園が約70年の歴史のある日本電子専門学校を新宿で展開しております。

ITですとかデジタルコンテンツのエンジニアですとかクリエイターを育成する、そういう専門学校でありまして、そこでですね10年以上、校長を務めておりました。ですからある意味でそういったIT分野の方、いわゆる職業教育については経験してきたと言えると思います。専門学校ですのでいろんなその時期に応じた新しい学科を作るといったことが求められておまして、その中ですね、中川様がマイクロソフトにいらしたときに情報ビジネスライセンス科っていう学科を一緒に作らせていただいたということがございました。一応私の紹介ですがあんまり時間がないってことで早めにちょっと話したいと思いますが、先ほど京丹後市様ですね、教育の現状というのを伺わせていただいてですね、本当に素晴らしい教育を展開されているなというふうに本当に思いました。丹後学っていうのがあるんだっていうのを初めて知りましてですね。あとICTの活用とかグローバルな展開とかいろんなことをやっておられるし、あの生徒さんも将来の夢や希望を持っているというふうな人に対して肯定的に答えた方が全国平均も高いというところなんかすごく素晴らしい教育をされているのだろうなというふうに思って聞いておりました。この準備会が京丹後市の新たな教育、人材育成のあり方に関する検討会というタイトルのもとに皆さん集ったわけですけど、何が問題なのかっていうことを少しはっきりさせた方がいいのではと思って聞いておりました。伺った中で理科とか数学とか国語の学力が若干全国より低いとかっていう、それが問題なのか。それはもうほとんど問題ないような感じをして聞いておりましたし、あと高校出たから京丹後市が出てしまう方々がいずれ戻ってきてもらうと言ったことがすごく大きな問題だというふうに捉えておられるのか。そうするとそれについていろいろ検討していくのはそのいわゆる今のSociety5.0を使って何とかっていうこととはちょっと違うのでは、そんな印象を持っています。以上とさせていただきたいと思います。

事務局：古賀様ありがとうございました。本当に最後におっしゃっていただいた何が

問題なのかっていうのはもう本当に大事なポイントかなと思います。今後、そのあたりも詰めていく必要があるかなと思っております。それでは次に関神田外語大学の高橋様をお願いしたいと思います。グローバル人材というところで関わっていらっしゃると思いますのでその辺りに関して、また本市のような地域でグローバル人材の育成どのように考えるべきかなどについてお話いただければありがたいと思います。よろしく願いいたします。

高橋委員：私は秋田県湯沢市の教育委員会に関わってまして、実は今朝、皆瀬中学校で中学校2年生と小学校の模擬授業をしてきたところで、ちょっと興奮が冷めやらぬまま参加しています。どうぞよろしく願いします。今実は肩書が神田外語大学で客員教授だったのですが、実は講師です。何故かといいますと実は私会社経営して、なおかつ京丹後市さんで使ってもらってるELSA Speak っていう会社でも働いていますので一応学校の方では正規の教授になれないので一応講師という役割で働いています。

私はですね元々13年間、私立中高の方で教員をやってまして最後に中学校の教頭になって今大学で働いている次第です。グローバル人材っていう文脈ですけど、私自身が実はアメリカ、イギリスとオランダの方に留学してましてそういう意味でも様々なところでどういうふうな知見を生かせるのかっていうのはお役に立てると思います。

また13年間その教員経験がありまして管理職もやっています。テクノロジーの会社で働いていますので実際にどういうふうに素材を学校現場へ落とし込んでそれがなおかつ効果でできるのかって、ものすごく僕は長けていると思いますので、そういうところでお役に立てればと思っています。実際京丹後市さんの方でもテクノロジーを使った教育やっていますのでそれをどういうふうにしてレバレッジして、地方の教育が素晴らしいということを都会にアピールできるのかっていうところをタクトピアの長井さんもいらっしゃいますので一緒に協働させていただいてグローバル人材育成ということで少し関わっていきたいと思います。グローバル人材の育成という文脈ですが、実は私2016年ぐらいから私の友人とで高校生を、例えばインドネシアと東南アジアの方に送って実際ビジネスをやるっていう探求型の教育をずっとやってきました。そういうノウハウを生かして、ぜひ京丹後市の方が面白い教

育、世界に目を向けた子どもたちっていうのを育てたいなと思っています。  
皆様今後ともよろしく願いいたします。

事務局：高橋様ありがとうございました。グローバルというところで大変これまでからご支援いただいております。引き続きよろしく願いいたします。それではちょっと海外の方からご出席をお世話になっております STEAM 教育というところで先ほどから Sea Labo という取組のことも出てきました。大変 Sea Labo でもお世話になりましたヤング吉原麻里子先生にお世話になりたいと思います。STEAM 教育といったところにも触れていただきながら本市のような地域でそういった教育をどのように展開すべきかなどについてお話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

ヤング吉原委員：ヤング吉原麻里子と申します。現在アメリカの西海岸の方におりまして、スタンフォード大学の国際総合文化教育プログラム Spice という名前ですが、そちらで講師と研究員をしております。また日本ではあの東北大学の方で工学部にあります技術社会システム専攻というところでの客員教授をさせていただいております、大学院生の論文指導なども行っております。2016年に、Sky Labo というのは非営利教育を大学院の仲間と始めたわけですが、夏休みなどを使って女子エンパワーメントと次世代人材の育成をゴールにした STEAM 教育に力を入れております。

太平洋の反対側におります私が本日こうして京丹後の皆様につながらせていただいているのは他でもなく濱副市長でございます。濱副市長さんがスタンフォード大学院にご留学中に現地でお目にかかれる機会に恵まれまして、その時いただいたご縁にて今回京丹後市の教育委員会の先生方と連携をして市内の中学生高校生を対象に、Kyotango Sea Labo というプログラムを実施させていただき非常に貴重な機会をいただいているわけです。昨年の9月にチームのみんなで初めて京丹後市を訪れることができまして、本当に現地の自然の美しさに魅了されたことはもちろんですが、何よりも教育委員会の先生方が本当に熱い思いで、何よりも地域のお子さんたちの学びを何よりも大切に考えておられることに本当に心から感銘を受けました。今年3年間のプログラムですけれども昨年度、その1年目を動かししましたので、今年の夏に2回目を実施させていただくためにまた伺わせていただくのを大変楽しみにし

ております。そのときにお世話になりました松本教育長ですけれども、先ほど教育長のお話の中で、15歳の時点で目指す生徒像は何なのか。京丹後市に育つ子どもたちが15歳になったときにどのような学びを身に着けどのような知識を持ってどんなスキルを持っているのか目指す人材像というのは何なのか。それを議論し、そこで掴んだそのイメージというものを幼児期の教育から高等教育まで一貫して教育者が、もしくは地域住民が共有していくということをおっしゃったかと思うのですが、それがこの京丹後市が目指しておられるところであって、今回この委員会を作られたのはそういう目的だったのかなというふうによく理解をさせていただきました。

私は今、シリコンバレーというアメリカ西海岸にあります地域ですけれども、そのシリコンバレーという地でイノベーター、本当にこれは面白い、これは私達の生活をより良くしてくれる、これは本当に世界を変えるのではないかというような本当にイノベーターな活動している方たちを対象に調査をする機会があるのですが、そういった人材に共通する要素は何なのか。それをまたそれを抽出しまして、そんな人材を本当に面白いSTEM活動している人材、そういう人たちをこれから育成していくために、私達にできることは何なのか。どうやって育成していけるのかそういったことを意識しながら研究活動と教育活動を行っているわけです。それを具体的に教育の活動につなげたのは、あのKyotango Sea Laboだったわけですが。そこで今年の夏、Sky Laboが強調させていただいた三つのマインドセットというものがありません。私達Sky Laboではこれのイノベーターのマインドセットと呼んでいます。一つ目がThink out of the box その英語の表現の中で、箱から出て発想するというのがあるのです。言ってみれば普段その当たり前だと自分たちが思っている固定概念だとか、そういったものから自分をまずは出してあげて、人がそれってありえないでしょうというような発想をすること。Think out of the box ボックスから出て考える、まずそれを一つめ強調しました。二つ目がGive it a try チームメイトと連携をして、そのちょっとありえなさがなさそうな、でも面白そうな発想ができたときにそれがうまくいくかどうかというリスクアセスメントをまずひとまず置いておいて、まずは試してみよう。発想、連携して面白そうなありえない発想ができたのだから

まずは試してみよう。Give it a tryこれを二つ目に強調しました。三つ目に強調したのがFail forwardつまりくことで前進をするという概念です。そのありえない発想するときってというのは、最初はうまくいなくて当たり前です。本当はそれが当たり前、リスクがあって当たり前、だからうまくいかなかったときには、それでポシャってしまうのではなくてむしろ自分は普段私がやる心地の良いゾーン、コンフォートゾーンと呼んでいますが、心地の良いゾーンから自分を出してあげて、新しいことに挑戦した証拠なんじゃないっていうふうに考えられるようにしよう。それを積み重ねることで、その失敗の中から自分が学んでいくスキル、その見つけたときに、本当にフィールすることで、むしろ遠くまで飛躍できるというマインドセットというもの京丹後市の中学生3年の方高校2年生の方に強調させていただきました。今回の先生方が、あのさっきからいろんな先生方が繰り返しおっしゃったのですが、Sea Laboに参加された生徒さんが本当に36人、私達にとっては素晴らしいデータポイント、36名のデータポイントだったのですがやっぱり全体から言えばまだまだ少数。ですから、ここでSea Laboというプログラムに参加する機会がなかった生徒さんにも、京丹後市のこの教育を通じてデザイン思考のマインドセットであるこの三つの考え方アプローチというものをこれから学び行くような機会につなげていただければ嬉しいなというふうに思いました。今後ともよろしく願いいたします。

事務局：ヤング吉原様ありがとうございます。深夜だと思えますけども本当にありがとうございます。Sea Labo、デザイン思考ということで今後もさらに広めていくような取組にご支援いただければと思います。それではタクトピア株式会社の長井様にお願いしたいと思います。アントレプレナーシップということで関わっていらっしゃるということで、このアントレプレナーシップ教育の必要性、重要性あるいは本市での展開というようなあたりでお話いただければありがたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

長井委員：こんにちは、タクトピア株式会社代表取締役長井と申します。よろしく願いいたします。会社の話ですけれども、弊社タクトピアという会社2015年立ち上げまして、ミッションとしてはグローバルリーダーシップの育成というところを掲げております。対象は主に小中高というところで生徒さんを対象

に全国いろんな場所でプロジェクトをやってきました。実際に実施するコンテンツとしても、カテゴリー名で言うならば、アントレプレナーシップというところになるかなというふうに思います。今まで2.5万人ほどの生徒さんと一緒にプログラムを進めてまいりました。この場合のアントレプレナーシップは大学生以上とか、大人の方になると実際企業を作ってGDP貢献するみたいな文脈も結構あると思うのですが、弊社の言うアントレプレナーシップはもう少し広めに捉えておりまして、人生に主体性を持って関わっていく、自分の人生だからぜひ自分で切り開いていこうという、そういったマインドセットの部分も広義のアントレプレナーシップとして捉えております。

余談ですが、社名のタクトピアにはタクトが入っておりまして、私は元々音楽専攻だったということで指揮棒というところを主体性として使っております。弊社はこれまで本当にいろんな活動をさせていただきましたが貢献できそうな点がいくつかあるのかなというところ初回ですのであげていきたいと思います。一つはまずグローバルなネットワークということでグローバルあるいはローカルのネットワークいろいろな主体の方々とこれまでも付き合った部分で知見が活かせるところがあるかなと思います。学校さんはもちろんのこといわゆる基礎自治体の皆様ともよくプログラムをやってきました。先ほど産業界の皆様のお話も聞いていましたら、結構今年度、我々神奈川県川崎市と仕事をやってアントレプレナーシッププログラムをやりましたけれども、ものづくりであるとか、技術面というかそういった軸に置くような事例としてもちょっと近いところもあるかなと。もちろん違うところもいっぱいあると思いますがそういった経験も弊社貢献できるなというふうに思いました。またアントレプレナーシップを掲げていますのでそういった支援団体であるとかあるいは起業家自身であるとかそういったところのネットワークもあるなというふうに考えております。あとは学校さん自治体さんとやってきておりますので、いわゆる教育システム、今まで日本の強力な武器である教育システムというところに融合する形での学びのデザインというところには経験値があるかなというふうに思います。民間で教育やっていますという方を、場合によると日本の教育にいい思い出がない方いらっしゃるのですが、僕はあの日本の教育、非常に恩恵を受けたと思いますし、ぜひこ

れから世代の日本の教育に恩返しをしたいというふうに思っている人間ではあります。そんなところでいろいろ貢献ができたらいいなというふうに思っております。

先ほどいろんな方のお話を聞いていて大きなテーマだなと思ったところが、やはりこの地域に残って守る人材なのか、それとも世界に羽ばたくのかという、そういったジレンマの部分が大きなテーマであるのかなというふうに改めて思った次第です。我々もアントレプレナーシップを教えてっていう表現もあまりないですけど、お伝えして、生徒さんとか一応大人の方もやっているのですが、そうなったとき外に行きたくなくなっちゃいますよね。もっともっと広い世界で自分の人生を選択していきたいということは当然起こるということであって、これはどうしてもジレンマが起こるということがあります。ここで答えが出るものでは当然ないのですけれども。なんとなく個人的には、その一時期は出ていくかもしれない。先ほど、何人かの方がやはり10年15年あけてそして戻ってきて京丹後の素晴らしさ、やはり驚いたというのがストーリーだったと思うのですがそういった入ったり出たり流動性が高まって結果的には長い目では、いいことになるようなことが本当はできたらいいなかなと思ったりですとか、あるいは出た人が戻ってくるだけではなくて、魅力を持った国内外の人材が京丹後市に入ってくるというようなそういったストーリーも含めて考えられたらいいなかなというふうに思っているのですが、ここはいずれにせよ、やはりビジョンどういうまちを目指すのか、ビジョン言語化が必要ではあろうというふうに思いました。あと私最後になりますが、まだ京丹後市お伺いできておりませんで、非常にあの現場行ってですね、まちの素晴らしさを感じたいなというふうに思っております。今後も機会を増やして行かせていただきたい。皆様と一緒にこの京丹後市から先端事例と思われるような、他の市町村が続いてくるように、事例が作れたらいいななっています。よろしく願いいたします。以上です。

事務局：長井様ありがとうございました。人生に主体性を持って日々切り開いていくというプレミアシップのそういった趣旨を理解させていただきました。またぜひ機会がありましたら一緒に議論さしてもらえたらありがたいかなと思います。それでは一旦あの会場の中の方にマイクを移しまして委員の方からは

最後になります京都教育大学の竺沙先生にお願いしたいと思います。竺沙先生にはこれまで本市で様々な教育関係の会議で座長等お世話になっております。今日のいろんな様々なご意見をどのように受け止めていただいたか、また今後のこの会の進め方などについてもご示唆をいただけるとありがたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

竺沙委員：京都教育大学の竺沙と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。今日もご紹介いただきましたようにもう10年ぐらいになるかと思いますが京丹後市の学校教育等に関わらせていただいております。私の現在の役割というのは、専門職大学院の一つですけれども、教職大学院で教師を育成するそういう大学院で、しかも現職の教員が学びに来るところで京丹後市からも遠方ですけれども、2年に1回必ず小学校中学校の先生方を派遣いただいて、今年度も小学校の先生を派遣していただいております。そういう関係でこちらも大変お世話になっているというところでございます。

専門も教育行政と学校経営というところを専門にしておりますので教育委員会の様々な仕事の仕方なりあり方についてもこれまでも考えてまいりましたので、そういう点からもこちらも学ばせていただきながら、こちらの考えていることいろいろとお伝えしてきているというところであります。そういう関係の中で今回こういう会議の委員ということ仰せつかったというふうには思っております。今日いろんなご意見を伺って委員名を見たときに本当に驚きまして、何をしたいのだろうっていうことが率直なところです。

当然いろんな専門家がおられてそれぞれ一流の方々だなということを感じましたし、地元の方もおられてというところで、それは多分良さなんだろうなど。私達が考えるべきことは発想の転換であろうというふうには思っていて、下手な案をまとめるのはやめた方がいいだろうということは感じました。まとめてしまったら、それぞれの意見の良さがなくなってしまうだろうと感じています。それからもう一つは子どもの教育ということですので、子どもの本音っていうか、実際そういうこと思っているとか別にして京丹後市の子どもたちの声としては京丹後市の今の課題を自分たちに押し付けるなどということはあると思います。そういうことを本当に思うかどうかは別にして、でも何かあったらそういうことを思うのではないか。そういった声を常に思い



ながら私達はそれに向き合わなければいけないのではないのかなっていうふうに思っています。それが本気のことだろうと。どうしたらいいかまでは出てこないかもしれませんが、こんなことをしたらこんなことが見えるのではないかっていうふうな刺激をやっぱり子どもたちをはじめ関係者の方々に伝えていくってということが非常に大事なことはないかなというふうなことを感じながら私は聞かしていただいております。こういうプランをしたらこんなふうになるだろうとプランを作るかもしれませんが、でもそういうプランを作りすぎるとうまくいかない。思い通りにいかないはずなので、どうしたらいいかはやっぱり当事者が考えるべきことであって、当事者に任せるってことを私達は考えながらこんなことを見る必要があるのではないかとこんなことを考える必要があるのではないかと、あるいはこういうことやってみたらこんな世界が開けているのではないかとということをやっぱり伝えていくってことが大事かなとそういったものをどう伝えていくのかということが人材育成ということにつながっていくのではないかなと思っています。私もずっと教育のことを考えてまいりましたので、あまり教育ということをやらない方が子どもを育つはずですので、本当に育成しようと思えば余計なことはしないということが大事だろうというぐらいの発想の転換といったそういうことでもあるわけですけども、そういうところをどっかで持つておかないといけないし、押し付けになってしまうところがあるので、本当にどうしたらいいかは子どもたちが考えるべきことで、ここに戻ってくるかどうかというように私達があまり考えない方がいいと思っています。当然思いとしてあるのは当然なので、だからどうしたらいいかっていうことではなくて、本当にどういう世界が今あるのかということを私達はしっかり考え、またそれぞれのお立場からそれぞれに見ておられる世界ってことを伝えていただきたい。お互い私達か、そうしたいろんな意見に刺激を受けて楽しければ多分この会を成功するのだろうと、それぐらいの感覚でいいと思います。何かの案を下手に作ろうと思えば、多分ありきたりなものしか作れない可能性があります。あるいはすごいプランを作ったとしても、それをやるだけで先生方は必死になるかもしれない、地域の方々も必死になって本当に見るべきものを見ないといけないところが見えずに、プラ

ンに縛られてしまったり振り回されたりするということもあるかもしれませんが。面白い議論ができるのではないかと、あるいはしたいなということ私達は感じたら、それでいいのではないかとというぐらい、委員の皆さん方はそれぐらいの気楽な気持ちで参加した方が、実りのある議論になっていくように思いました。それをどう整理していくとか、どんなふうに教育委員会として受け止めていくかっていうところは私が責任もって教育委員会の方々と一緒に悩みたいと思いますので、そこは私の役割かなというふうには思っております。私が悩めば悩むほどこの会は成功だという、それぐらいの感覚で私も腹をくくってここに参加させてもらおうということ今日強く感じたというところでございます。どうもありがとうございました。

事務局： 笹沙先生ありがとうございました。最後に心強いお言葉をいただきまして安心いたしました。時間になって申し訳ないです。委員の皆様から大変貴重なご意見をたくさん頂戴いたしました。オブザーバーの皆様からできればコメントいただきたいと思っております。時間がもうないというふうにお伺いしていますが、金沢大学の塩川先生お時間が可能でしたら大丈夫でしょうか。

塩川オブザーバー： 金沢大学の塩川です。私の方も濱副市長あるいは岩本先生、牧野先生の方から前々職文部科学省高校担当の時教えていただいたものでございます。現在金沢大学の方でも附属の高校から小学校中学校それに幼稚園もあるところでございます。そうした中で、やはりそのグローバル、グローバルの両方の人材育成していくためには地域まる抱えでしっかり取り組む必要があるかなということ我々学校として考えているところでございまして、そうした中で一方とりわけ、なかなかその学校の設置者ごとにまる抱えでやらないといけな一方、シームレスですとかシームが生じている状況があるかなというふうに思っております。ぜひそうしたところをブレークスルーするようなやり方を今回のご議論の中で進めていただけるとありがたいかなと思っておりますし、我々もぜひそういったことを勉強させていただければかなと思っております。オブザーバーの立場ではありますけどまた勉強させていただきたいかなと思っております。

事務局： 塩川様ありがとうございました。時間がない中、貴重なご意見ありがとうございました。それでは最後になりました京都府丹後教育局の大西様にもお願

いしたいと思います。よろしく願いいたします。

大西オブザーバー：丹後教育局学校教育担当指導主事の大西と申します。よろしくお願いいたします。

私は京都の宇治市の出身でこちらの方に来て人口1人増やしていることに貢献させてもらっているかなと思っております。ちょうど人生の半分ぐらいをこちらで過ごしていて、丹後を愛して、来たときにはもう海の方見に行ってもよくドライブをしていたなと思い、今皆さんの話を聞きながら思い出しました。丹後教育局としては京丹後市様の方には次世代型小中校連携英語教育事業について3校にお世話になりまして大変いろんなことを進めていただきました。その中で私が連携というふうなことで保幼小中、それから高校もお話がありましたけれども、私高校籍ですけれども、小学校の授業を見て、すごく衝撃的で、こんなこと、こんなすごいことやっているのだから、高校はもっとやらなければならないなと思ったのですけれども。国際人を育成するというようなこととお話もありましたけれども、高校はこの流れを受け止めてやらなければならないなということを、いずれまた現場に帰ることになると思いますが、そういうことを推進していきたいというふうに改めて思いました。それから産業との連携というふうなお話もありましたけれども、丹後こども未来プロジェクトというところで丹後機械協同組合様の方には各企業様に出前事業の方お世話になっていろいろつないでいただいています。その中で小学校のときに、出前授業を受けた生徒さんがプログラミングに大変興味を持って、峰山高校に入って自分たちが今度出前授業を行ったというふうな流れができていうふうなことでそれはプログラミング出前授業で自分はこういうふうな方向に進みたいというふうに思ったらしいです。そういうふうな流れができていうところで、また地域に残ってくれるというようなことも一つの方向性として出ていけばいいのかなというふうなことで局の仕事のつなぐところをしっかりと連携できるように進めていきたいという思いでおります。

事務局：大西様ありがとうございました。進行がうまくいかず時間を少しオーバーしてしまいました。大変申し訳ございませんでした。今日のまとめというのは私の能力ではちょっとできないので、後ほど事務局の方でしっかり内容も整理しましてお伝えをさせていただきたいと思います。本当に不慣れな進行でご

迷惑をおかけしました。本当に貴重な今後の検討の土台となるいろんなアドバイス等もいただけたと思います。次回以降にしっかりと生かしてまいりたいと思います。それでは最後に次第のその他というところで資料の4の方で今後の進め方というのは案ということでお示しさせていただいています。次回の連絡をさせていただいていたかと思いますが、3月30日の15時からということでお世話になりたいと思います。また改めてご出欠の確認をさせてもらいたいと思います。令和5年度からのこの会の検討事項などについて議論お世話になればと思います。令和5年度からのことにつきましてはまた次回も踏まえましてペース的にはひと月からふた月に1回程度というあたりでお世話になればというふうに思っております。その他については以上でございます。全体通しまして委員の皆様の方から何かちょっと言い残したことやご質問等がありましたらと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。本当に今日は駆け足のような進行で時間がなくて申し訳ございませんでした。それでは以上をもちまして、第1回目の京丹後市の新たな教育人材育成のあり方に関する検討会の準備会を閉会とさせていただきます。本日は本当にお忙しいところご出席をいただきましてありがとうございます。またオンラインでご出席いただきました委員の皆様にはお忙しい中大変ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。それではこれで閉会といたします。ありがとうございました。